

目指す学校像

高き志【こころざし】

地域とともにある

勢いのある学校

No. 26 (R元. 11. 11発行) 文責 校長 福田雅也

見て、聞いて、感じて…体験の大切さ(その2)

永井隆記念館や如己堂には博士の思いが詰まっていて、とても感動した。平和と命の大切さを訴え続けた博士からのメッセージを忘れない。そして、語り部さんから受けとった「平和のバトン」をつなぎたい。

これは、6年生一人一人が修学旅行後にまとめた「修学旅行新聞」の中で、茂野ゆうなさんが綴っていた感想文です。短い文章ですが、ゆうなさんの真っ直ぐな思いが伝わってくる力強い文章です。

私は、長く小学校の教員をしていますので、これまで何度も長崎での平和学習に取り組んできました。一言で平和学習と言いますが、年を経るごとに学習の様子や形態は変化しています。以前から行われていた語り部さんからの講話に加え、現在は、ボランティアガイドさんに案内していただくフィールドワーク形式の学習が主流となり、その見学地も増えてきています。以前は、原爆資料館と平和公園、原爆投下中心地くらいをバスガイドさんの案内で見学していたように思います。現在フィールドワークで回っている場所の多くは、バスの車窓から簡単な説明があっただけだったのを覚えています。現在は、間近に見て、聞いて、感じる機会が増えているのです。

この子を残して…この世をやがて私は去らねばならぬのか。
母のおいを忘れたゆえ、せめて父のおいなりとも、と恋しがり、私の眠りを見定めてこっそり近寄るおさない心のいじらしさ。
戦の火に母を奪われ、父の命はようやく取りとめたものの、それさえも間もなく失わねばならぬ運命をこの子は知っているのであろうか…
「この子を残して」(永井隆 著)より

フィールドワークが入るようになって、何度訪れても胸が熱くなるのが、ゆうなさんの感想文にも登場し、この本の著者である永井隆博士が、最後の三年ほどを過ごされた「如己堂」と、その隣にある「永井隆記念館」です。永井隆記念館では博士の業績や、平和を願い命の大切さを訴え続けた生き様の素晴らしさをしっかりと学ぶことができますが、それに加え、たった2畳の木造の部屋(如己堂)をバスからではなく、間近に見て、説明を聞くと、そこに実際に横になっていた永井博士を目の前に感じ、博士に近寄る娘「茅乃ちゃん」の姿までもそこにあるように感じる事ができるのです。原爆の悲惨さを資料館で見聞きすることがマクロな視点であるなら、原爆の悲惨さを個人や家族といったミクロな視点から、自分や自分の家族と重ねて思いを深めることができるのが、この「如己堂」「永井隆記念館」なのだと思います。

ゆうなさんの感想文からも伝わるように、きっと子どもたちも同じように感じてくれたのだと思います。

今の時代はICT活用教育が重要視されてきています。私たちの御船町もICT活用教育を積極的に推進しています。そのICTを活用すれば、様々なことを手軽に調べることができます。現地に行かなくても、離れていても学習ができます。また、ICTを活用したほうが分かりやすい学習内容もあります。

しかし、体験すること、体感することができるのであれば、そのほうがより深い学びにつながる学習内容もあると思います。先週号でお知らせしたような事例に加え、平和学習は、まさにそのような学習内容なのだと思います。

6年生は、今回の修学旅行で素晴らしい体験的な学習ができました。今週末の学習発表会において、6年生はそんな平和学習についてまとめた劇を発表する予定です。また、5年生は水俣病について、4年生は通潤橋についてと、見学旅行等での体験的な学習の成果を発表する予定です。それぞれの学年が、「見て、聞いて、感じた…体験学習の成果」を精一杯発揮してくれると思いますので、どうぞ楽しみにされておいてください。